

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00001

研究課題名(和文) 習慣を中核にすえた新たな心の哲学と心の科学の展開

研究課題名(英文) Developing a habit-centred paradigm of philosophy and science of mind

研究代表者

宮原 克典 (Miyahara, Katsunori)

北海道大学・人間知・脳・AI研究教育センター・特任講師

研究者番号：00772047

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：習慣は認知や行為の根本的な基盤をなす。しかし、現代の心の哲学と心の諸科学は、人間経験における習慣の意義を適切に理解するための理論的枠組みを欠いている。そこで本研究では、認知科学の分野で発達しているエナクティヴィズムの観点を基盤にして、現象学、プラグマティズム、日本哲学の伝統的な思想を取り入れながら、人間経験のさまざまな局面における習慣の独自の役割を探求した。具体的には、新たな習慣概念の確立、習慣を中核にすえた新たな心のモデルの確立、心の科学に対する意義の考察という三つの課題を設定して研究を推進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、心を一種のコンピュータ(情報処理装置)だとする支配的な見方に対して、心を生物学的な現象として理解する試みが始まっており、そのなかで心と習慣の関係への注目も高まっている。本研究では、現象学、プラグマティズム、日本思想の観点を取り入れながら、習慣とはたんなる機械的な仕組みではなく、人間の目的論的な性格を支えるものであるという考え方の発展に貢献した。

研究成果の概要(英文)：Habit forms the fundamental basis of cognition and action. However, current philosophy and sciences of the mind lack an appropriate theoretical framework to study its significance for human experience. This project explored the unique role of habits in various dimensions of experience based on the enactive approach, an approach to mind and cognition developing in the field of cognitive sciences, while incorporating insights from phenomenological, pragmatist, and Japanese traditions of philosophy. It was divided into three sub-topics: (1) Developing a novel conception of habits; (2) Developing a habit-centred model of the mind; (3) Exploring its implications for the sciences of the mind.

研究分野：認知科学の哲学、現象学、AIの哲学

キーワード：習慣 わざ 身体性 エナクティヴィズム 生態心理学 物語的自己 世阿弥

1. 研究開始当初の背景

習慣は認知や行為の根本的な基盤をなす。しかし、現代の心の哲学と心の諸科学は、人間経験における習慣の独自の意義を適切に理解するための理論的な枠組みを欠いている。一方で、習慣とは、特定の刺激に条件づけられた画一的な自動運動だという「機械論 (mechanism)」的な解釈を唱える人々がいる。他方で、それとは正反対に、習慣もまた知性的な認知プロセスの一形態だという「主知主義 (intellectualism)」的な解釈を唱える人々がいる。しかし、どちらの立場をとったとしても、心と習慣の関係を適切に理解することはできないように思われた。

2. 研究の目的

本研究では、現代哲学と認知科学で発達するエナクティヴィズムの観点を基盤にして、現象学、プラグマティズム、日本思想に含まれる心理学・行為論の洞察を取り入れながら、人間経験に対する習慣の独自の貢献を適切にとらえるための理論的枠組みを確立することを目的とした。具体的には、第一に、習慣と知能の関係を考察することに取り組んだ。すなわち、習慣とは、機械的に生じるだけの非目的論的なプロセスでもなく、概念的な知性が無意識のレベルで働いただけのものでもなく、知覚や情動の働きによって目的や規範にそくした振る舞いを実現する身体的知能の核心をなすものだというアイデアを発展させることを試みた。第二に、習慣はたんに過去に反復されてきた行動を再現するだけのものではなく、さまざまな局面において人間の行為や認識を形成するものだという仮説を追求した。第三に、このように習慣を中核にすえた心のモデルが心の諸科学に対してもつ意義を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、上記の三つの目的に対応して、新たな習慣概念の確立、習慣を中核にすえた新たな心のモデルの確立、心の科学に対する意義の考察という三つの課題を設定して研究を推進した。哲学と心の科学、また、哲学の内部でもさまざまな思想的伝統を横断的に参照するために、プロジェクトにはさまざまなバックグラウンドをもつ研究者が参加した。研究活動は、各研究参加者との共同研究、及び、各研究参加者の個人的な理論的研究を組み合わせる形で推進した。当初は、研究集会や国際会議を開催してプロジェクトメンバー全体での議論を推進する予定だったが、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響でそれらの企画は実行せず、研究代表者と各参加者の共同研究を中心に活動した。

4. 研究成果

本研究の成果は、12件の雑誌論文（日本語論文4件、英語論文8件）、4件の書籍（分担執筆4件）、9件の研究発表によって発表されている。以下、各課題における主な成果を抜粋して報告する。

【課題：新たな習慣概念の確立】哲学や心理学では、習慣を機械論の観点から理解することが一般的である。それによると、習慣とは、特定の刺激に対する反応として特定の決まった行動を生成する自動的なプロセスである。一方で、現代哲学では、習慣を行為の手続きに関する信念が自動的に利用されるようなプロセスとして理解する論者もいる。本研究では、これらの立場が行為における習慣の役割をどれほど適切に捉えられているかを検討して、次のような問題点を明らかにした (Miyahara & Robertson 2021; Cappuccio, Miyahara, and Ilundain-Agurruza 2020; Miyahara, Ransom, & Gallagher 2020)。第一に、習慣は目的論的な性格をもつ。特定の決まった行動を生み出すものではなく、特定のタイプの状況に対して特定のタイプの行為を生み出すものである。第二に、習慣には知覚的・情動的な性格がある。習慣がえられると、たんに特定のタイプの行動が自発的に作られるようになるだけでなく、環境に対する知覚的・情動的な応答にも違いが生じる。つまり、習慣は、たんに身体的な行動を生成するためのメカニズムではなく、世界を認識する心を形成するものなのである。以上のような見方は、メルロ＝ポンティの現象学、デュエイのプラグマティズム、そして現代のエナクティヴィズムにおいて共通している。

【課題：習慣を中核にすえた新たな心のモデルの確立】【 - 1: わざと習慣の関係】わざと習

慣は、どちらも非反省的な行為を生み出す点では共通しているが、一方で、その本性は全く違っているという見方がある。それによると、わざは状況への柔軟な適応を可能にするものであり、習慣は硬直した画一的な運動を生み出すものでしかない。他方で、熟練の技とは反復によって習慣化した技能実践にほかならないという見方がある。その代表格は、現代の現象学的哲学者H・ドレイファスの技能実践の理論である。本研究では、ドレイファスの技能実践論の基本的な方向性に賛同しながら、それを世阿弥の芸道論、とくに「初心」の概念の観点から批判的に検討し、ドレイファスの理論が健康で力強い身体像を暗黙の前提としていることを明らかにした(Miyahara 2022)。これは習慣とわざの関係を適切に理解するためには、それを支える身体のあり方との関係性を考慮する必要があることを示している。また、世阿弥の芸道論における「離見の見」の概念を生態学的心理学の観点から考察する文化横断的な手法によって、技能実践に含まれる知覚的な習慣を明らかにすることにも取り組んだ(Miyahara & Segundo-Ortin 2022)。近年、技能実践における心の働きに関する学際的な研究が多く行われているが、本研究は、この分野の議論に実質的な内容と方法論の両面において独自の貢献をなすものである。【 - 2: 共感の習慣的基盤】現代哲学や心理学では、共感とは、相手の心の状態を自分の心のなかで想像する作用(心的シミュレーション)として捉える。それに対して、本研究では、共感とは他者とのインタラクションに関連する習慣に基盤をもつ働きであるという新たな考え方を構築した(Miyahara & Hayakawa 2021)。とくに重要なのは、他者に対して受容的(receptive)な態度で臨む習慣である。これは他者に関する想像が独りよがりのものではなく、相手のニーズに寄り添ったものにすることに貢献する。【 - 3: 自己意識と習慣の関係】もともと予定していたテーマではなかったが、物語的な自己意識の発達における習慣の役割に関する考察も進めた(Miyahara & Tanaka under review)。自己意識は身体性と物語性を二つの性格としてもつが、そのふたつのあいだの関係はまだ十分に解明されていない。本研究では、身体の習慣性(環境との相互作用の歴史を通じて習慣を形成する傾向性)に注目するメルロ＝ポンティの身体論を用いて、物語的自己意識が(従来の研究では指摘されてこなかったような仕方)複線的に身体性に依存していることを主張した。すなわち、物語的な自己意識は形式・内容の両面において習慣的な行動や経験のパターンの影響を受けている。また、自己物語を語るという実践はそれ自体が社会的・文化的な習慣に基づいた、状況に埋め込まれた身体的な実践である。

【課題 : 心の科学に対する意義の考察】内観というテーマに注目して、哲学と科学を横断する研究を推進した。内観は、個人が自分の心の内面を振り返ってそこで起きていることを報告する働きだと理解するのが一般的である。しかし、現象学における反省のモデルに基づけば、内観は世界に対する習慣的な態度を一時中断(エポケー)することなしには成立しない。本研究では、このような一時中断のプロセスの存在を実証できるのか、これは具体的にどのようなプロセスであるのかを、哲学と神経科学を融合した手法によって研究した。新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響で実験実施に難航したため、プロジェクト期間内に研究成果を一般に公表できていないが、有力な脳計測データを与えることができた(Nishida, Hamada, Niikawa, & Miyahara manuscript)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Niihara Takuya, Miyahara Katsunori, Hamada Hiro Taiyo, Nishida Satoshi	4. 巻 2022
2. 論文標題 Functions of consciousness: conceptual clarification	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Neuroscience of Consciousness	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/nc/niac006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鈴木 啓介、宮原 克典	4. 巻 73
2. 論文標題 身体的自己意識の認知科学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生体の科学	6. 最初と最後の頁 13~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.2425201457	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮原克典	4. 巻 37
2. 論文標題 酒井麻衣子『メルロ=ポンティの他者論 現れる他者 / 消える他者「子どもの心理学・教育学」講義から』 (晃洋書房、2020年・二九一頁・5,500円・ISBN: 978-4771033634)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 133-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Miyahara Katsunori, Robertson Ian	4. 巻 40
2. 論文標題 The Pragmatic Intelligence of Habits	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Topoi	6. 最初と最後の頁 597-608
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11245-020-09735-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Cappuccio Massimiliano Lorenzo、Miyahara Katsunori、Ilundain-Agurruza Jesus	4. 巻 40
2. 論文標題 Wax On, Wax Off! Habits, Sport Skills, and Motor Intentionality	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Topoi	6. 最初と最後の頁 609-622
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11245-020-09720-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Niikawa Takuya	4. 巻 11
2. 論文標題 A Map of Consciousness Studies: Questions and Approaches	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2020.530152	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyahara Katsunori、Segundo-Ortin Miguel	4. 巻 200
2. 論文標題 Situated self-awareness in expert performance: a situated normativity account of riken no ken	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Synthese	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11229-022-03688-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 宮原 克典	4. 巻 36
2. 論文標題 徳倫理からのAI倫理を考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人工知能学会全国大会論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11517/pjsai.JSAI2022.0_3F40S2306	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早川正祐	4. 巻 28
2. 論文標題 人間尊重とタイミングの倫理—ケアの倫理からの新展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 死生学・応用倫理研究	6. 最初と最後の頁 33-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Niikawa Takuya	4. 巻 -
2. 論文標題 Naive realism, imagination, and hallucination	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Phenomenology and the Cognitive Sciences	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Niikawa Takuya, Hayashi Yoshiyuki, Sawai Tsutomu	4. 巻 14
2. 論文標題 A Teleological Approach to the Ontological Status of Human Cerebral Organoids	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 AJOB Neuroscience	6. 最初と最後の頁 204-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/21507740.2023.2188304	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 7件/うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Katsunori Miyahara, Seisuke Hayakawa
2. 発表標題 Empathic perspective-taking, mental simulation, and receptivity
3. 学会等名 The 95th Joint Session of the Aristotelian Society and the Mind Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuko Ishihara , Katsunori Miyahara
2. 発表標題 Flow and two-fold-being-in-the-world
3. 学会等名 Problematizing harmony, disrupting harmony: perspectives from philosophical traditions (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunori Miyahara
2. 発表標題 Habit and narrative selfhood
3. 学会等名 The 1st Hokkaido-Tartu Philosophy Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunori Miyahara
2. 発表標題 Habit and narrative selfhood
3. 学会等名 Tokyo Forum of Analytic Philosophy (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunori Miyahara
2. 発表標題 Narrative self-constitution as an embodied skill
3. 学会等名 Minds in Skilled Performance: Conference and Roundtable (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunori Miyahara
2. 発表標題 The Zoom-mediate life in social-distancing
3. 学会等名 Experiences of social distancing during the COVID-19 pandemic (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Seisuke Hayakawa
2. 発表標題 Time, Receptivity, and Empathic Knowing: The Significance of Epistemic Timeliness
3. 学会等名 American Philosophical Association Pacific Division Meeting (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Seisuke Hayakawa
2. 発表標題 Empathy, Timeliness, Virtuous Hearing: Against Timing-Related Injustice
3. 学会等名 International Lecture Session and Workshop on Philosophical Practice (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takuya Niikawa
2. 発表標題 Consciousness and Artificial Life
3. 学会等名 The Philosophy of Experiential Artifacts Seminar (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Lai L Karyn, Stephen Hetherington, Waldemar Brys, Shun Tsugita, Yu Izumi, Masaharu Mizumoto, Chienkuo Mi, Man-to Tang, Seisuke Hayakawa, Michael Slote, Mog Stapleton, Nikolaj Jang Lee Linding Pedersen, Jens Christian Bjerring, Leo K. C. Cheung, Sydney Morrow, Shane Ryan, Margus Ott, Miyahara Katsunori	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 385
3. 書名 Knowers and Knowledge in East-West Philosophy: Epistemology Extended	

1. 著者名 Fausto Caruana, Italo Testa, Maria Brincker, Massimiliano L. Cappuccio, Anthony Chemero, Elena Clare Cuffari, Shaun Gallagher, Rebekka Hufendiek, Daniel D. Hutto, Jesus Ilundain-Agurruza, Mark Johnson, Jonathan McKinney, Katsunori Miyahara, Georg Northoff, Tailer G. Ransom, Ian Robertson, Maki Sato et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 459
3. 書名 Habits: Pragmatist Approaches from Cognitive Science, Neuroscience, and Social Theory	

1. 著者名 Maren Wehrle, Diego D' Angelo, Elizaveta Solomonova, Susanne Schmetkamp, Felipe Leon, Miguel Segundo-Ortin, Glenda Satne, Natalie Depraz, Yuko Ishihara, Olaf Witkowski ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 298
3. 書名 Access and Mediation: Transdisciplinary Perspectives on Attention	

1. 著者名 Ralf Muller, Raquel Bouso, Adam Loughnane, Bret W. Davis, James W. Heisig, Heinrich Dumoulin, Josef Sudbrack, Koichi Tsujimura, Yuko Ishihara ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 399
3. 書名 Tetsugaku Companion to Ueda Shizuteru	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新川 拓哉 (Niihawa Takuya) (20769658)	神戸大学・人文学研究科・講師 (14501)	
研究分担者	吉田 正俊 (Yoshida Masatoshi) (30370133)	北海道大学・人間知・脳・AI研究教育センター・特任准教授 (10101)	
研究分担者	濱田 太陽 (Hamada Hiroaki) (40842258)	沖縄科学技術大学院大学・神経計算ユニット・客員研究員 (38005)	
研究分担者	石原 悠子 (Ishihara Yuko) (40846995)	立命館大学・グローバル教養学部・准教授 (34315)	
研究分担者	早川 正祐 (Hayakawa Seisuke) (60587765)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・特任准教授 (12601)	
研究分担者	西田 知史 (Nishida Satoshi) (90751933)	国立研究開発法人情報通信研究機構・脳情報通信融合研究センター脳情報通信融合研究室・主任研究員 (82636)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田中 彰吾 (Tanaka Shogo)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オランダ	ユトレヒト大学			
オーストラリア	ウーロンゴン大学	ニューサウスウェールズ大学		
米国	リンフィールドカレッジ			
オランダ	ユトレヒト大学			